

## 【論文】

## 孫文支援者であった山田純三郎の 戦前から戦後における日中関係観とアジア観 —孫文死後の山田の主な発言と行動を手掛かりとして—

愛知大学東亜同文書院大学記念センター研究員 武井義和

### はじめに

本論は、孫文支援者として辛亥革命や中国革命に深く関わった山田純三郎（1876～1960年。以下、適宜「山田」と略記）が、孫文死去（1925年）後に示した日中関係観や、さらにはアジア観について、記録として残されている山田純三郎自身の主な発言や行動を手掛かりとして、明らかにするものである。その考察対象とする時期も戦前から戦後、具体的には1930年代から1950年代までと長い時間幅を設定する。その理由は、同じく孫文を支援した宮崎滔天（1871～1922年）、萱野長知（1873～1947年）、菊池良一（山田兄弟のいとこ、1979～1945年）らに比べ、山田は戦後10数年経過した頃まで存命であり、比較的長生きであったことにある。すなわち、戦後は高齢のため主な活動ができなかったことは想像されるが、孫文支援の経験を通じて形成した日中関係観やその延長線上に位置付けられるアジア観を、戦前から戦後にかけて追ってみていくことで、何が変化し何が変化しなかったのかという点が浮き彫りになると考えられるからである。また、これらを追究していくことは、山田が「大アジア主義」や日中関係に関する孫文の思想をどのように自分で理解し、その理解に立った上で戦前から戦後

に至るそれぞれの時代においてどのように発言し、日中関係観やアジア観を表わしていったのか、という諸点の解明にもつながる。

ここで、簡単に山田純三郎の経歴について触れておきたい。

山田純三郎は1876年に旧弘前藩士山田浩蔵の四男として弘前で誕生した。長兄は1900年に孫文が指揮して起こした清朝打倒のための「惠州蜂起」に参加し、命を落とした山田良政（1868～1900年）である。純三郎は1900年に東亜同文会が清国南京に開設した、日清友好の実現を目指す学校「南京同文書院」に入学した。しかし、当時華北で発生していた義和団事件の影響により、南京同文書院が同年8月下旬に上海し、翌1901年に「東亜同文書院」と改め上海で再出発すると、事務職員兼助教授として勤務した。日露戦争（1904～1905年）に陸軍通訳官として出征、1907年1月に東亜同文書院に教授として復帰するが、2ヵ月後の3月には退職し、南満洲鉄道株式会社（満鉄）に入社する。明治末に旧満洲の撫順で採掘される石炭の販路拡大のために上海へ派遣され、満鉄社員の身分でありながら三井上海支店内で勤務した。1911年に勃発した辛亥革命の頃より革命に関わるようになり、孫

文が同年 12 月に欧米から中国に帰国すると、山田純三郎は孫文の秘書的な役割を担っていく。そして孫文が 1925 年 3 月に亡くなるまで彼の革命活動を支え続けた。

一方、孫文が亡くなった後の山田純三郎は、さまざまな活動に従事していく。政治方面では 1925 年 9 月に成立した広東国民政府の顧問就任や、1931 年に反蔣介石政権として広東省に成立した広東国民政府の顧問就任、メディア方面では 1920 年代から 1930 年代半ばにかけて上海で江南正報社や江南晩報社という新聞社の経営、教育方面では 1930 年代半ばより上海日語専修学校の経営に携わったことなどが挙げられる。

以上のような山田純三郎の経歴は、結束博治『醇なる日本人 孫文革命と山田良政・純三郎兄弟』（プレジデント社、1991 年）、保阪正康『仁あり義あり、心は天下にあり 孫文の辛亥革命支えた日本人』（朝日ソノラマ、1992 年）、保阪正康『孫文の辛亥革命を助けた日本人』（筑摩書房、2009 年）、馬場毅「孫文と山田兄弟」（『愛知大学国大問題研究所紀要』第 126 号、2005 年）などの著作や論文で知ることができる。だが、孫文死後の山田純三郎の状況も取り上げた結束氏を除き、保阪氏や馬場氏が主として取り上げるのは孫文が亡くなるまでの時期である。

一方、結束氏も山田純三郎の生涯を扱っているとはいえ、孫文死後の記述については粗い箇所がある。特に、山田純三郎による孫文理解のあり方や、それと密接に関わる山田の日中関係観、アジア観についてはまだ十分に考察されたとはいえない。したがって、本論はそうした著作や先行研究の空白域を埋めるべく、冒頭に示した問題意識に沿って考察を行うものである。

考察に際し、次の 3 つの点に注目する。1 つ目は、1930 年代から 1945 年までの時期における、山田純三郎の日中関係観やアジア観である。この中で、彼が孫文の「大アジア主義」などをどのように理解し、またそれに基づく彼の日中関係観やアジア観はどういうものであったか、も重要な点として含まれてくる。2 つ目は、日中戦争期において、日本の国策とは異なった見解を示した点である。3 つ目は、山田独自の孫文理解に基づく日中関係観やアジア観が、1945 年を境としてどの部分が断絶し、どの部分が連続したのか、という点である。

以上を通じて、これまで本格的に取り上げられてこなかった山田純三郎の意識が浮き彫りとなるであろう。

資料は既に公刊されているものとともに、愛知大学東亜同文書院大学記念センター所蔵資料を用いる。

### 【凡例】

- ①引用資料の漢字は、全て常用漢字とした。
- ②引用資料および資料タイトルには「支那」などの用語が記されている場合があるが、原文のままとした。

## 1. 1930 年代以前の山田純三郎の発言

まず最初に、1930 年代以前の山田純三郎の発言について簡単に確認しておきたい。管見の限り、1925 年の孫文死去前に純三郎が公に発言した内容が活字化されたのは、1917 年に故郷の弘前で行った講演だけである。それは連載であったが、中国革命の現状、当時の北京政府と孫文側革命派の人物紹介、そして日本政府が北京政府を支援していることを批判し、孫文の広東政権を支

援することの必要性を主張するものであった<sup>1</sup>。

これは孫文存命中の発言として珍しいものである。孫文の協力者として活躍していた頃の山田純三郎の発言記録が残っておらず、また彼自身も公の場で発言したり書き残した様子が見られないのは、それによって革命活動に影響が出ることを避けるためであったと考えられる。

一方、孫文死去直後の1925年12月には東亜同文書院学生会館において、広東は「赤化」したという世間に見方に対して事実を決してそうではない、中国は「赤化」しない等の自己の中国情勢認識を示した講演をしている<sup>2</sup>。山田純三郎が広東国民政府の顧問を務めている頃である。その後、1928年には三井上海支店で「革命夜話」と題した講演をしている。山田が広東から上海へ移った後の時期にあたるが、革命の思い出話という色彩が強い<sup>3</sup>。

だが、1930年代に入ると様子は変化し、辛亥革命や中国革命の回想だけではなく、政治的な発言を積極的に行うようになる。

次に、そうした政治的な発言に示される日中関係観についてみていくことにする。

## 2. 「対支問題意見書」(1933年)

山田純三郎が日中関係の打開策について自己の見解を表明した最初のもは、1933年2月にまとめた「対支問題意見書」である。この時期は満洲事変(1931年)、上海事変(1932年)と日中間の武力衝突が続けて発生し、また1932年3月には満洲国が建国されるなど、日中関係が緊迫した状態であった。「対支問題意見書」の冒頭には「従来何等ノ言説ヲ発表シタルコトナシト雖今日ニ於テ尚ホロヲ緘シテ語ラサルハ聊カ報効ノ至誠ニ欠クルモノアルヲ思ヒ、…微衷ヲ開陳シテ座右ニ呈シ以テ愚意ノ在ルトコロヲ明カニセントス。」<sup>4</sup>とあり、これまで発言してこなかった姿勢を転じて意見を表明するという考えが示されているが、その土台には日中関係を改善したいという考えがあったことは想像に難くない。

この意見書では、まず日中両国の問題点について論じている。満洲事変や上海事変が勃発した理由は日中両国の重要な地位に就いている人々に人材がなく、民間がこれを等閑に付したことに問題がある、また、両国が相反するようになった原因は両国が自国の主義主張にだけ忠実であり、相手の実情に頓着しないことにあるも指摘する。そ

<sup>1</sup> 『東奥日報』1917年8月10日、11日、12日、13日、14日、16日、17日、18日、19日、21日、22日。

<sup>2</sup> 山田純三郎講演「広東の現状」27～29頁(『滬友』第29号、東亜同文書院滬友同窓会、1926年2月)。

<sup>3</sup> 「革命夜話」(山田家資料ファイルA-188『支那革命夜話 三井洋行樓上 山田純三郎』)。なお、山田純三郎が広東から上海へ移ってきた経緯について、1935年12月22日に「…大正十五年ニ私ハ広東カラ「ボロージン(露国共産党)」ニ追ハレテ上海ニ来マシタ…」(「正金銀行ヲ中心トスル昔ノ上海ヲ談ル」34頁、1935年12月22日、山田家資料ファイルA-132『支那革命と私 山田純三郎 協和』)と語っており、上海へ移動した年代が判明する。一方、「ボロージン」はコミンテルンから広東に派遣され、広東政府顧問として大きな権限を有したボロジンのことであるが、山田が語るような内容を示す資料は管見の限り見つかっていない。ただ、この点は彼がボロジン、さらには共産党勢力をどう見ていたかを示す重要なポイントであろう。

<sup>4</sup> 山田純三郎「対支問題意見書」(1933年2月)。

の上で、日中ともに同罪とも論じており、中国側にも問題があったという見方が示される<sup>5</sup>。

だが、「支那側ニ就テハ論セス」として、本題は日本の対中政策についてさまざまに論じられている。まず、これ以上さらに中国北部において武力を用いることは絶対に不可であることを主張する。その理由として、中国側が日本の野心がどの程度なのか常に危惧しているため、絶対的な安心を与えることは最も喫緊事に属すること、そして上海事変の時のように撤兵することが容易ではないことを挙げる<sup>6</sup>。

続けて、直接交渉の促進が両国にとって最善で必須の方法であるとするが、そのためにはまず中国に強力な政府を確立させることであると主張する。その理由は、国民政府（1927年蒋介石により南京に樹立された政権）に直接交渉の意志があるとしても、能力が欠如しているためであると述べる。したがって、日本側が直接交渉を誘ったり進めたりしても、到底成就できないとの見方を示す。国民政府の勢力の及ぶところは江蘇省や浙江省を中心とする四、五省であり、広東にある西南政府や華北の旧軍閥勢力、中国中部における共産軍の勢力なども存在することを理由に挙げ、国民政府は中央政府として対外交渉の任に当たる資格を有していないとみなす。もし日本の主張を受け入れさせるならば、まず国民政府に彼らの政敵を圧倒できるだけの力を養成させなけ

ればならず、そのためには日本が積極的に援助する以外に良策はないとの見解を示す<sup>7</sup>。

もしこの方法が駄目である場合、中国全土の強固な統一が不可能であるという前提で、次の2つの案が示される。1つ目の案は、中国各地に存在する上記の各勢力を個々に独立させる方策をとり、日本は各政府と親善の関係を確立するというものである。2つ目の案は、ここまで述べてきたいずれの案も実行が難しい場合とした上で、多少の時間はかかっても満洲国を王道楽土として速やかに建設を完成し、全中国人にこれを羨望する気持ちを起こさせるように努力すべきであるというものである。その意図は、そうなれば彼ら中国人も、自分が所属する地方を満洲国と同様の状態にまで到達させようという意識となり、結果として日満両国の真意は彼らに徹底し、彼らは真意を正しく理解するようになり、日中両国の親善も期せずして得られるというものである<sup>8</sup>。

意見書の結論部分では、上記で示された第一案、つまり中国側との直接交渉や国民政府の強化などは、頗る陳腐な議論の感があるが、最も正鵠を得たものであると信じて疑わない、と論じる。また、今もし日本の国策を確立してこれに当たらなければ、欧米諸国が隙に乗じて干渉し、遂に收拾がつかなくなり「皇国」の安危を保つことができなくなることを恐れる、と結論付ける<sup>9</sup>。

5 山田純三郎「対支問題意見書」（1933年2月）。

6 同上。

7 同上。

8 同上。

9 同上。

ここまでみたように、「対支問題意見書」には日本が取るべき方法としていろいろな案が示されているが、山田純三郎がこれらをごとまで実現可能と考えていたのかについては分からない。しかしいずれも、これ以上の日中関係の悪化を避け、正常化に戻したいという山田純三郎の思いが反映されたものであったといえる。特に第一案は、彼が孫文の支援者として中国に長年居住し、中国の政治情勢をみてきた経験から導き出された自己の考えであったと捉えることができよう。

ところで、意見書には中国の各勢力の状況について、ある有力な中国人の観察が引用されているが、この中で、「今日支ノ国交ヲ改善シ一条ノ新途徑ヲ求メントスルナラハ日支ノ在野有力者ガ提携シテ大亜洲主義ヲ両国民衆ニ説キ、欧米ノ極東侵略ニハ日支ノ別アルモノニアラズ現在支那ヲ侵略シテ居ル以上将来日本ヲ侵略セナイトハ保証デキヌ…」<sup>10</sup>の一文も含まれている。ここでは挙げていないものの中国政界の対日意見などについて詳しく述べていることから、氏名が明らかにされていないが、山田純三郎とつながりのある中国人政治家かと推察される。

いずれにせよ、ここで触れられている「大亜洲主義」（大アジア主義）、「欧米ノ極東侵略」は山田に影響を与えた箇所と推察される。なぜなら、それ以降の彼の発言には、「日支聯盟」とともに、「大アジア主義」、「白人からの圧迫、白人からの備え」などがキーワードとして繰り返し登場するように

なるからである。そうしてみると、「対支問題意見書」の執筆過程は山田にとって、自らの日中関係観を形成する一つの契機であったとも位置付けられる。

### 3. 「対支問題意見書」以降、日中戦争勃発（1937年）までの発言

1934年9月に東京日日新聞社の主催で行われた講演会で、山田純三郎は革命の回顧話とともに、南京政府の成立過程と現状について述べる中で、1924年に孫文が神戸で行った「大アジア主義」講演に言及し、「孫文はあくまで、死ぬまでもやはり大亜細亜主義、或は日支同盟で行かねば白人の圧迫を受けるということを考えて居たのであります。」と論じた。また、広東軍政府時期に広東で排日が生じないことに憤慨した学生たちが孫文に詰め寄った際、孫文は学生の本分は勉学であることを諭して学生たちの排日を抑制したことも回想している<sup>11</sup>。

そして、今日の南京政府の対日姿勢を「一面交渉一面抵抗」と評し、あわせてそれに関する中国人の全体的な認識について、「何らかの機会を利用して仇をしてやれ、満洲を取り返すことはできないまでも何とかしてやろうというのは中国人の全般的な考えだろうと私は想像しております」との見解を示す。さらに続けて、「嘗て孫文は、日支同盟をやらねばならぬ、最後には白人の圧迫を受けるからといって教えておりますけれども、教え子が先生の教えを守らないというわけではありませんが、国民としては、私はそこに行くのは当たり前だと思います」

<sup>10</sup> 山田純三郎「対支問題意見書」（1933年2月）。

<sup>11</sup> 山田純三郎講演「南京政府の正体」17頁（『講演パンフレット通信』274号、東京講演会、1934年）。

と述べ、中国国民が排日的思想から転じて孫文が主張した「日支同盟」、すなわち「日支聯盟」の実現に進むことは当然のことであると論じている<sup>12</sup>。

ここからは、中国人の認識を理解しながらも、中国国民政府や中国人の対日方針や対日感情について、「大アジア主義」による日中の相互理解を要求したものであるといえ、日本の立場に立った発言といわざるを得ない。

また、中国は政治勢力的に西南と中央、北方の3つに分かれる可能性があることも指摘し、それは日本が「日×戦争」が起きた場合には有利に作用するとの考えを示す。「×」はアメリカかソ連が入ると思われるが、北京を中心とする北方に日本に好意を持った政府があれば、南方の方から軍隊がやってきても北方で防ぐことができる、という理由である<sup>13</sup>。

もちろん、これは中国が分かれていくとともに日本が第三国と戦争を始めたと仮定しての話であるが、上記のような考えは「対支問題意見書」に示された、中国全土の強固な統一が不可能な場合、日本は中国各地に存在する上記の各勢力を個々に独立させる方策をとり、日本は各政府と親善の関係を確立するという案を意識し、その延長線上として発言されたものと推察される。

一方、山田純三郎は欧米列強に批判的な認識も示している。その一例が、1934年に出された「天羽声明」に対するものである。

上記の講演と同年の1934年に、日本外務省情報部長の天羽英二による天羽声明が発表されると、翌年に山田はこれを支持している。天羽声明とは重光葵外務次官が在上海有吉明公使に発した訓電を公表したものであり、全5項目のその訓電には、列強が中国に対して共同動作を取ることに對して、中国の覚醒や保全のため不幸な結果を招く恐れがあるため主義として反対すること、また、各国の中国に対する行動が東洋の平和や秩序を乱す性質のものには反対せざるを得ないとする内容も含まれていた。そのため、中国や列強諸国が異議を表明したものである<sup>14</sup>。

山田純三郎は天羽声明に対して列強が口をはさむ筋合いにないと述べた上で、「日支両国は提携、聯盟して、白人に備えよ」とは孫文氏の遺志であり、遺訓であって、実に東洋永遠の平和建設にとって、確乎不拔の鉄則なのだ。日本にとっても支那にとっても、今後この途以外に絶対に進路は無いのである。…わが「天羽声明」はいみじくも、かの孫氏の日支聯盟案の本質の一端を吐露してくれているのではないか<sup>15</sup>と述べている。「天羽声明」を、孫文の遺志・遺訓に通じるものがあるとして評価していた様子が浮かび上がる。

しかし、日中関係の前途は難しいという認識も山田は持っていた。日中戦争勃発直前の1936年10月、当時上海で頻発した抗日テロ事件に関して、日本から派遣された

<sup>12</sup> 山田純三郎講演「南京政府の正体」18頁。

<sup>13</sup> 同上、21頁。

<sup>14</sup> 「天羽声明」については、臼井勝美『新版 日中戦争』10～11頁（中公新書、2000年）を参照した。

<sup>15</sup> 竹田克巳『隨筆 世界を描く五十人集』363、371頁（立命館出版部、1935年）。

記者の主催により「上海在留邦人座談会」が開催された。12名の日本人が出席したが、その中に山田も雑誌「上海」社長という肩書きで参加している。その席上、彼はテロに対する認識や中国人の抗日意識などについて、伝聞も含めて述べているが、それを踏まえて日中関係について「元通りに直して、私共が革命当時孫文と一緒にやった当時のことを考え、現状を其処に戻すまでには、二十年もかかると思われます。…それ位の努力を払ってかからなければ、日支関係を元の朗らかな状態に引き戻すことは難しいと思います。」<sup>16</sup>と、中国側の抗日意識は根強く、それを乗り越えて日中関係を正常化へ向かわせることは容易ではないことなどを述べている。

そして、山田純三郎に親しい中国人が語った言葉を引用しつつ、「日本を怨むあの気持ちは却々消えますまい。だから二十年と言ったのですが、余程大決心をするか何かしてやらない間は、支那が孫文の言う日支聯盟、大亜細亜主義で行くようになるまでには容易のことではないと思います。」<sup>17</sup>として、孫文が主張した「日支聯盟」、「大アジア主義」の実行が目標であること、しかしその目標に辿り着くことは簡単ではないという認識を示している。

以上の発言から、山田純三郎が示した日中関係のあり方および欧米列強に対する批判は、彼が孫文の遺志・遺訓であるとする「日支聯盟」、「大アジア主義」に則して展開されていたことが分かる。

#### 4. 日中戦争勃発以降、日本敗戦までの山田純三郎の発言

##### (1) 中国批判、日中関係観、アジア観

1937年に日中戦争が勃発すると、山田純三郎の発言はそれ以前に比べ多様化していく。その中で、「日支聯盟」、「大アジア主義」の論点に基づいたものとしては、蒋介石や国民政府への批判と、戦時中に日本政府が南京国民政府(汪兆銘政権)に対して行った治外法権撤廃に対する評価が挙げられる。

1939年、山田純三郎は「国民政府殊に独裁主義派の蒋介石一味は…先師孫文の日支聯盟、大亜細亜主義の教えを守らないばかりでなく、却ってこれを悪用しようとするような悪逆非道な行動を敢えてなし、相俱に提携し琴瑟相和して東洋平和の確立強化を図るべき友邦日本に対して無謀にも抵抗し、今次事変の発生を見るに至ったことは返す返すも痛恨事である…」<sup>18</sup>と記し、蒋介石側は孫文が説いた「日支聯盟」、「大アジア主義」に背く行動を取り、結局日中戦争に至ったと論じるとともに、山田純三郎は戦争勃発に至った非は蒋介石側にあるとして、日本側の立場に立って批判している。

時がやや下った1943年1月、日本政府が南京国民政府に対して租界還付や治外法権撤廃を表明した際には、それらが「日本の積極的主唱と協力によって行なわれ、佛國政府亦之に賛して追従し、茲に中国主権の完全なる回復、確立が実現の曙を迎えるに至った。…之によって中国と中国人とは本来の独立自主の面目に立還った…」、また「孫先生以来の素志が、遺言通り日本を指

<sup>16</sup> 「上海在留日本人座談会」280～281頁(『改造』1936年11月号)。

<sup>17</sup> 同上、284頁。

<sup>18</sup> 山田純三郎「支那革命と私(完)」33頁(『協和』第13巻19号、満鉄社員会、1939年)。

導者とし、日本の力に依って達成されたことを想う時、地下に眠る先生の歎びも察するに余りある」<sup>19</sup>と記し、中国主権の回復がなされて孫文の理想が達成されたという認識を示す。

このように、「日支聯盟」、「大アジア主義」は戦争末期になっても、山田純三郎の中国観や日中関係観の基軸であった。

ところで、山田は中国や日中関係について論じるだけでなく、他のアジアの民族についても言及するようになる。山田が1943年暮れに記したと思われる「亜細亜復興の曙に 今にして生きる孫中山先生の絶筆」という山田純三郎の直筆原稿の中で、「日支聯盟案」は全アジア民族の結合の中軸をなすべき「日支聯盟」の急務と、その具体案を説いたものであると述べている<sup>20</sup>。日中関係の重要性を指摘しながら、「全アジア民族の結合」という形で、日中両国以外の民族も視野に入れて広がりを持っていることが分かる。また、1943年11月に開催された、日本支配下のアジアの国々の首脳(タイ、ビルマ、フィリピン、自由インド仮政府、満洲国、南京国民政府)が東京に集まった大東亜会議について、1924年に孫文が山田純三郎に書いて与えた「亜細亜復興」という書を用いて、この書の意味が今日において如何に素晴らしく生かさされつつあるとも述べる<sup>21</sup>。

以上の記述から、アジアは欧米列強から解放されるべきであり、そして日中両国の

結びつきを軸としてアジアは一つになるべきである、という山田純三郎のアジア観や、欧米列強に抑圧されたアジアの解放が、孫文が生前に唱えた「日支聯盟」、「大アジア主義」に示される主張に沿って実現した、という山田独自の見方も浮かび上がる。

こうしてみると、山田純三郎にとって孫文が打ち出した「日支聯盟」、「大アジア主義」は孫文死後も山田の中で生き続けている思想であり、山田にとって中国の現状や日中関係を捉える基本的な視角となっていたこと、さらに戦争末期には、それを土台として他のアジア諸民族も含めて発言内容が広がっていったと捉えることができる。

## (2) 山田純三郎の孫文理解

### ① 「日支聯盟」、「大アジア主義」

ここまで、「日支聯盟」、「大アジア主義」を軸に、山田純三郎が示した日中関係観や中国観をみるとともに、戦争末期のアジア観についても触れたが、1930年代以降、山田純三郎が繰り返し用いてきた「日支聯盟」、「大アジア主義」について、ここで先行研究を参考に概要を押さえるとともに、山田独自の理解方法についても検討を加えておきたい。

「日支聯盟」は1923年11月に孫文が山田に託して犬養毅に届けさせた書簡を示しており<sup>22</sup>、日本がヨーロッパに追随して北京政府を支援し、中国革命に反対する行動

<sup>19</sup> 山田純三郎「中国主権の確立と孫中山」45頁(『上海』1028号、1943年)。

<sup>20</sup> 山田純三郎「亜細亜復興の曙に 今にして生きる孫中山先生の絶筆」(山田家資料ファイルD-18『雑誌コピー等 導報』)。欄外に「昭和十九年一月号へ」とあることから、当時彼が社長を務めていた上海雑誌社が発行する『上海』へ寄稿した原稿と思われる(該当号未見)。

<sup>21</sup> 同上。

<sup>22</sup> この書簡は、広東から日本へ帰国する山田純三郎に対し、孫文が第二次山本権兵衛内閣の逓信大臣を務めていた犬養毅に渡すよう託したものである(山田純三郎「シナ革命と孫文の中日聯盟」276頁、亜東



を取るという中国政策への批判や、日本は抑圧された者の友となるのか敵となるのかという問いかけの上で、日本政府が中国革命の成功を助けることや、ソビエトの承認を提案する内容などが含まれている<sup>23</sup>。

「大アジア主義」は1924年11月に孫文が神戸で行った「大アジア主義」講演で示された孫文の認識であり、孫文がアジア固有の文化を讃え、仁義道德の「王道」を基礎にした「大亜州主義」によってアジア諸民族の団結を図り、西方の「霸道」の文化と闘って平等な世界を実現しようと訴えるとともに、明治維新以来、日本が達成した成果である不平等条約撤廃と日露戦争の「勝利」がアジア諸民族の独立運動を鼓舞してきたことを評価し、日中提携の重要性を説いたものである。一方で、日本に対する批判を口にする事を意識的に抑制、または禁欲したのもであった<sup>24</sup>。

この講演の中で、孫文は民族独立を求めて、ヨーロッパにより滅ぼされたり制圧されたアジア東西の民族は連帯しなければならないと「大アジア主義」を唱えたが、特に東では運動の原動力である中国と日本は連帯しなければならないと唱えた<sup>25</sup>。つまり、ヨーロッパからの自立独立のためにアジアの民族は団結し、その中で中国と日本が連帯する必要性を述べる。また、孫文は「大アジア主義」でどのような問題を解決しなけれ

ばならないかという点について、「アジアの苦痛を嘗めている民族のために、どうすればヨーロッパの強盛な民族に抵抗できるのかという問題」であるとも述べ<sup>26</sup>、アジアの民族に苦痛をもたらしているヨーロッパへの抵抗について触れている。

同時に、日本は王道文化と霸道文化の両方を実行しているという点や、ソ連は王道を主張し英米の一部の者も王道を実行しているという点も述べられている<sup>27</sup>。

## ②山田純三郎の理解

孫文の犬養毅あて書簡や、「大アジア主義」に接した山田純三郎は、それらをどのように理解したのであろうか。「日支聯盟」については「亜細亜復興の曙に」を引用して紹介したが、孫文の犬養毅への書簡には、「日支聯盟」という語句を用いて表現する箇所はない。したがって、山田純三郎が孫文の「日支聯盟」として用いる語は、彼自身の認識の反映であったといえることができる。

では、この書簡の中で、山田はどの部分を取ってそうした認識を形成したのであろうか。これは山田の記述に具体的に記されていないので、推測の域を出ないが、孫文が日本は抑圧された者の友となるのか敵となるのかと問いかけた後で、犬養毅が志を実行できれば日本は必ず抑圧された者の友になるだろうとし、「日本政府は現在、断固かつ決

倶楽部、1961年、深町英夫編訳『孫文革命文集』327頁、岩波書店、2011年）。

<sup>23</sup> 深町英夫『孫文』185～187頁（岩波書店、2016年）。

<sup>24</sup> 安井三吉「講演「大亜細亜問題」の成立とその構造」13～14、15頁（陳徳仁・安井三吉編『孫文・講演「大アジア主義」資料集』法律文化社、1989年）。

<sup>25</sup> 馬場毅「孫文の大アジア主義について」5～6頁（『中国社会の基層変化と日中関係の変容』愛知大学国際中国学研究センター編、日本評論社、2014年）。

<sup>26</sup> 前掲『孫文革命文集』445頁。

<sup>27</sup> 前掲「孫文の大アジア主義について」6頁。

然と支那革命の成功を助け、〔中国が〕対内的には統一し対外的には独立して、列強の束縛を一挙に打破できるようにすべきです。これにより日支の親善を図ることができ、東アジアの平和が永遠に保たれます。」と記し、また、日本の対中国政策批判の前に「日本の〔明治〕維新は支那の革命の原因、支那の革命は日本の維新の結果であって、本来は両者が一連のものとして、東アジアの復興を成し遂げるのです。」とも記す<sup>28</sup>。これらは孫文が日中両国の関係のあるべき姿を説いた部分ともいえるが、山田純三郎はこうした部分を独自に解釈した可能性が浮かび上がる。

一方、「大アジア主義」については、山田直筆の1944年3月2日の日付けが記されている満洲国大同学院研究所学生への講案の中で、「大アジア主義」の項目において「不平等撤廃を駆逐して白人を駆逐 亜細亜人の亜細亜」<sup>29</sup>と記していることから、山田は「大アジア主義」講演の中で孫文が述べた日中連帯の部分をも山田純三郎は意識したものと推察される。つまり、山田純三郎の思考の中でアジアの民族の自立独立を妨げ且つ苦痛を与えている存在としてまずヨーロッパが意識され、そこから「白人の圧迫、白人への備え」という考えが登場し、同時に白人からの自立独立のために日中両国が同盟する必要性が導き出されたと推察される。

しかし、孫文が同時に述べた、日本は王道文化と霸道文化の両方を実行しているという点や、ソ連は王道を主張し英米の一部の

者も王道を実行しているという点について、山田の認識は希薄であるため、孫文の大アジア主義を自分なりに理解したものであると捉えられる。

なお、戦争末期のアジア観として表出したアジア民族については、犬養毅への書簡の一文「支那の革命が一旦成功すれば、安南、ビルマ・ネパール・ブータン等の諸国は、きっとまた帰順して中国の藩属になることを願うでしょうし、インド・アフガニスタン・アラブ・マラヤ等の諸民族は、きっと支那に倣いヨーロッパ〔の支配〕から離れて独立するでしょう。」<sup>30</sup>や、「大アジア主義」講演の中の、ヨーロッパからの自立独立のためにアジアの民族は団結することや、アジアの民族に苦痛をもたらしているヨーロッパへの抵抗などが意識されたものと推察される。

もっとも、上記の犬養毅への書簡のその一文は、前半の大中華主義と後半の反帝国主義が混在していると指摘されるが<sup>31</sup>、山田は自覚的か無自覚的かはともかく、特に後半部分を意識して内在化していったのではないかと推察される。

### (3) 日本の対中国政策の見直しの主張

山田純三郎は日中戦争勃発後に中国に対する批判や、日本を自讃する発言をするだけでなく、日本にも対中国政策の見直しを主張している。1940年4月と10月の2種類のメモ書きを手掛かりとしてみていきたい。いずれも近衛文麿に対する発言の要旨

<sup>28</sup> 前掲『孫文革命文集』333～334、335頁。

<sup>29</sup> 「中国革命の精神と亜細亜復興」(山田家資料ファイルD-24『純三郎の講演原稿 弔辞原稿』)。

<sup>30</sup> 前掲『孫文革命文集』335頁。

<sup>31</sup> 前掲『孫文』186頁。

である。

「四月三日華族会館ニテ二時間に亘り公の御心労を感謝」と題されたメモ書きには、山田純三郎の中国観が示されている。当時、近衛文麿は東亜同文会会長のかたわら枢密院議長を務めていたが、山田純三郎も東亜同文会が経営する南京同文書院、東亜同文書院に在籍していたことから、近衛文麿に面会できたのであろう。

さて、メモ書きには、重慶に移転した蒋介石率いる国民政府は依存主義をとり、また共産党とはますます結束し、大会戦を避けて遊撃戦で日本軍占領地区内を攪乱するため、悪影響がもたらされると指摘する。「依存主義」とは重慶側が援蒋ルートに象徴されるような米英からの支援を指している。そして、「遠分撤兵は無論減数さへ不可能」とも指摘するが、これは中国側の攪乱により日本軍の撤兵や減数が困難になることを示していると思われる<sup>32</sup>。

こうした事態が継続すると戦争は膠着状態に陥ることになるが、それについても山田純三郎は「現地徴弁の策を講ずる策を取る事」とし、持久策として豚や鶏を飼い、野菜作りを兵隊にやらせることが示される。それは日本の物資の緩和を計ることにつながるという意識があった<sup>33</sup>。

また、1940年に汪兆銘を首席として誕生した南京国民政府と日本との摩擦招来の可能性や、日本の同政府に対する過干渉への戒めに対しても指摘している。前者は、南京

国民政府は政策実行に際して日本と衝突する恐れがあり、また日本も同政府に対して不満を抱く恐れがあること、そして後者は経済問題や政策問題で干渉しすぎる傾向があるというものである<sup>34</sup>。

なお、汪兆銘一派に対する見解を披露するとともに、重慶側の崩壊は非常謀略に出なければ不可能であること、そして重慶と和平を講じない限り真の和平は訪れないというある人物の発言に関し、最もであると好感を示すと同時に、重慶側の要人の中には一刻も和平を希望する者があるが、「依存派」が強く、また重慶側の汪兆銘に対する感情の問題により、重慶側に和平を呼びかけることは当分頗る困難であると指摘する<sup>35</sup>。

また、10月30日の日付けが入っている「全面和平ニ就テノ私見」は、文面からして同じ1940年のものと判断できるが、これも近衛文麿にあてたものであったことが分かる。彼はこの時には内閣総理大臣を務めていたことから、山田純三郎は日中関係の好転を総理大臣の文麿に託して再度進言したものと考えられる。

ここでも、山田の様々な見解が示されるが、目を引くのは、4月の発言と変わって重慶の国民政府と日本の和平を希望するという主張が示されていることである。すなわち、汪兆銘の不徳と微力は到底、全面的和平は望み難いとした上で、日独伊三国軍事同盟成立後の日本にとり一大使命である南進、またその他に備える必要上、「隣邦ト握手ス

<sup>32</sup> 山田家資料ファイル D-23 『山田純三郎の原稿（全面和平）No.4』。なお、「依存」が英米に依存することであるという点は、<sup>36</sup> 「全面和平ニ就テノ私見」に「重慶政府ハイカニモ米英ニ依存」とあることから分かる。

<sup>33</sup> 同上。

<sup>34</sup> 同上。

<sup>35</sup> 同上。

ルヲ急務トスル」、そして「忍ビ難キ耐ヘ寧ロ日本ヨリ進ンデモ重慶ヲ相手ニスルカ又遺憾ナガラ第三者ヲ介入シテモ和平工作ニ着手スルヲ希望シテ止マザル処ナリ」と、日本側から進んでも重慶側との和平工作を主張する<sup>36</sup>。これは、三国軍事同盟の締結（1940年9月）という国際情勢とそれによる日本の国策方針という観点に立脚した主張であった。なお、ここでいう「忍ビ難キ耐ヘ」とは、文字通り重慶を相手とすることを指しているが、これは、近衛文麿が第一次内閣を組閣していた1938年1月に発表した声明「国民政府を対手とせず」<sup>37</sup>という方針を転回せざるを得ないことにも通じる。

また、日本政府が南京国民政府を承認することを確定したことについて、山田純三郎は半信半疑であるとしながらも、憂慮を禁ずることができないと吐露し、もしそうであるならば「日支ノ戦争ハ到底数ヶ年間<sup>(ママ)</sup> 経 続ノ不幸ヲ見ルノ外ナシト信ス」、そして「今後数ヶ年間耐ヘ得ルヤ否ヤ実ニ不安ニ不堪モノアリ」との憂慮も示す。これらは日中戦争が長引くことで日本が疲弊していくことへの不安を示したものと捉えられるが、山田は近衛文麿への希望として、中国情勢に精通する権威者4、5名を招いて忌憚なき意見を聞き、最後の判定を下すように要望している。「純三郎最後ノ御前ニ恐懼三拝奉懇願」<sup>38</sup>と結んでいることから、彼の強い願いが込められていたことが分かる。

このような山田純三郎の主張は、1941年

に4月10日に上海日本総領事館特別調査班嘱託の木村英夫から受けたインタビューでも示されている。それは、日本の和平工作には蒋介石を相手とする以外に方法はないという考えとともに、日本政府が承認した南京国民政府への批判的な見方であった。山田純三郎は「自分は飽くまで戦争をやめよと主張する。然して全面和平を主張する。それは終始一貫したる国家的信念である。」と述べる。しかし続けて、その信念を貫徹させる見込みはないとも述べる。その理由として、日本政府が南京国民政府を承認したことと、上記のような国家的信念をやり遂げる人材が日本にいないことを挙げている。また、「畢竟全面和平の道は戦争をやめることを第一義とする。蒋介石は素よりのこと、支那民衆悉く和平を望まないものはないであろう。然して全面和平は汪精衛〔引用者注：汪兆銘のこと〕相手では絶対不可能である。全面和平の相手は飽くまで蒋介石でなければならない」と、日本が承認した汪兆銘の南京国民政府ではなく、蒋介石を交渉相手としなければならないと指摘する<sup>39</sup>。

だが、現状において全面和平に導く道程の中には、非常に大きな困難や矛盾が横たわっていることも指摘する。全面和平は国策に反する行動をとらなければ、現状より推してその望みは遂げ難いが、国策に反したことをいえば国賊となるため、ここに「甚だしき支那事変処理の問題があり、また我々の最も苦しい立場がある」と述べ、そし

<sup>36</sup> 「全面和平ニ就テノ私見」（山田家資料ファイル D-23『山田純三郎の原稿（全面和平）No.4』）。

<sup>37</sup> 江口圭一『体系日本の歴史⑩ 二つの大戦』318頁（小学館、1993年）を参照した。

<sup>38</sup> 前掲「全面和平ニ就テノ私見」。

<sup>39</sup> 高綱博文編・解説『日本占領下上海における日中要人インタビューの記録—木村英夫著『亜細亜再建秘録 敗戦前夜』』6頁（不二出版、2002年）。以下サブタイトルは省略。

て最後に「全面和平は現状において絶対不可能」との結論を出す<sup>40</sup>。同時に、このインタビューの中で、山田純三郎は戦争をどうしてもやめなければならないという信念から、日本に赴き南京国民政府を認めれば戦争の処理、ひいては全面和平は絶対に覚束ない旨を、先輩や要路の人々につぶさに述べたが一蹴され、残念至極だと述べる<sup>41</sup>。これは近衛文麿への進言も意識していたものとも推察される。

以上の発言から、山田純三郎は日本が中国と全面和平の交渉を行う際の相手は蒋介石であるべきだと主張するとともに、中国側にも平和を望まない者はいないとして、戦争を止めるべきであるという当時の国策とは異なった意見を自己の信念として述べている。しかし同時に、それを主張することにより「国賊」として処分されることへの苦渋を示すなど、日中戦争に対する山田純三郎の葛藤が垣間見える。

## 5. 第二次大戦後の山田純三郎の認識

第二次大戦における日本の敗北により、1945年までの時期に山田純三郎が示した中国観や日中関係観、そして日中戦争を止めさせようとする行動や思いは無に帰した。したがって、それらは1945年をもって断絶したことになる。

しかしながら、戦後の彼の行動や発言をみると、1945年以前との連続性を見て取ることができる部分も存在する。本章ではこ

の部分に着目して明らかにしていく。

山田純三郎は1948年12月に上海から引き揚げ、東京に居住した。それから1960年2月に死去するまでの間に行った注目すべき活動の一つに、「亜細亜復興会」という組織を立ち上げ、1955年3月12日に東京の湯島聖堂で「孫文去逝三十周年記念式典」を主催したことが挙げられる。

1955年4月に発行された機関誌『亜細亜復興』には、孫文の「大亜細亜主義を基本とするアジア諸民族及び国家の独立、自由、互助共存によるアジアの繁栄を期待する」<sup>42</sup>という亜細亜復興会の趣旨が記されている。その機関誌である『亜細亜復興』は1954年の孫文誕生日に創刊したと記されている。孫文の誕生日は1866年11月12日であるから<sup>43</sup>、その日に機関誌が発行されたことになる。また、全12条からなる手書きの「亜細亜復興会草案」では、「本会の規約は昭和二十九年十一月十二日に遡り施行する」(第11条)とあることから、亜細亜復興会は実質的には機関誌が最初に発行された1954年11月12日に立ちあがり、後から規約草案がまとめられた様子が浮かび上がる<sup>44</sup>。

さて、亜細亜復興会は孫文の「大アジア主義」を基本理念と位置付けているが、より具体的に、規約草案で確認しておきたい。まず、「本会を孫文先生の命名による亜細亜復興会と称す」(第1条)とともに、「本会の日本本部を東京に置くが、将来、中国本部、韓国本部、比島本部などを当該国に設ける。

40 前掲『日本占領下上海における日中要人インタビューの記録』7頁。

41 39に同じ。

42 『亜細亜復興』第6号(1955年4月12日)(山田家資料ファイルB-43『父の雑誌 弔辞等の原稿 成田 林氏等』)。

43 前掲『孫文』2頁。

44 「亜細亜復興会草案」(山田家資料ファイルB-43『父の雑誌 弔辞等の原稿 成田 林氏等』)。

ほか各地に支部を置く。」(第2条)、「本会は孫文先生の大亜細亜主義を理念とし相互援助の下に亜細亜民族の国家の発展と繁栄を図る事を以つて目的とする。」(第3条)、「本会は本会の役員会において本会の目的を達成するために適当と認められたる各民族、各国家間の文化の交流並に経済の合作などに必要な合法的事業をなす。」(第4条)などと記されている<sup>45</sup>。

この当時は、日本と韓国や中華人民共和国との間に国交はなく、またフィリピンは戦争の記憶から反日感情が強く渦巻いていた状況である。にもかかわらず、亜細亜復興会の趣旨や「亜細亜復興会草案」では、山田純三郎は孫文の「大アジア主義」を基盤として、日本とアジア諸国との関係を含めつつ、広くアジアに目を向け、諸民族や国家の独立、国家の発展や相互協力を理念とし、その実現のために文化交流や経済合作などを掲げている。山田が孫文の理念の一つと捉え、戦争末期に示していたアジア民族の結合というアジア観が、形を変え継続し、また拡大したと捉えることができる。

さて、「孫文去逝三十周年記念式典」は亜細亜復興会の第一回目の事業として企画したものであったが<sup>46</sup>、そこで山田純三郎が捧げた祭文には、孫文が中国民族の解放を念願し続けたと述べた上で、それが国際的と中国国内的のそれぞれにおいて持つ意味を、次のように指摘する。国際的には列強の束縛を脱して自主独立の国家を成し、各民

族間の平等を要求することであったこと、また中国国内的には、強権をもって民衆を窒息させるような統治体系を絶対的に排撃し、人と人との間の平等を要求することであったとする<sup>47</sup>。

また、山田純三郎はそれ等をまとめて、「そこには、夫々の国に於ける、民族と歴史と伝統とを熱愛し尊敬する孫先生の大亜細亜主義から生まれた民族主義の根本精神があった」と論じるとともに、日本が起こした戦争への反省と戦後の東アジア情勢へのまなざしが続く。その中で、孫文が死の直前まで切望していたのは「日華親善による亜細亜の復興」であり、神戸での「大アジア主義」講演について「亜細亜復興の中核としての日華親善による日本の進む可き具体的大道を示されたものした。」と述べているが<sup>48</sup>、このあたりの認識は1945年以前と変化なく、依然として山田純三郎の思想的中枢となっていたことが分かる。

その後、転じて現代世界に目が向けられ、「冷厳なる世界の現実の中から真の平和を求めて苦悩しつつある私たちにとり孫先生の大亜細亜主義こそ、対立する全世界に対処する一大啓示であることを確信し、茲に改めて日華提携による亜細亜復興のため」に、我々同志一同は尽力する旨述べて締めくくられる<sup>49</sup>。この最後の部分は、戦後の世界における東西冷戦をはじめ、中国大陸における国共内戦や朝鮮戦争、インドシナ戦争など、アジアにおいて第二次大戦終結後

<sup>45</sup> 前掲「亜細亜復興会草案」。

<sup>46</sup> 42に同じ。

<sup>47</sup> 同上。

<sup>48</sup> 同上。

<sup>49</sup> 同上。

も戦いが引き起こされており、平和が程遠い状況を踏まえ、それらを克服するために孫文の「大アジア主義」は有効であること、またその基本は「日華親善」「日華提携」であるとする。

ここでは第二次大戦後の世界やアジアが抱える問題を解決するための方法として、「大アジア主義」を論じていることが特徴として挙げられる。また、「日支」にかわり「日華」という用語が新たに用いられていることが変化として挙げられる。

こうしてみると、1945年以降の山田純三郎は、孫文の「日支聯盟」、「大アジア主義」を戦後の時代状況に合わせて論じるとともに、それに沿って活動したといえることができる。

## おわりに

以上、1930年代から1950年代までの長期間を対象として、山田純三郎の日中関係観やアジア観を追うとともに、それを大きく形作った孫文の「日支聯盟」や「大アジア主義」をどのように自分なりに解釈していったのか、などの点も取り上げてきた。

まず指摘できるのは、山田純三郎は時代に合わせた発言や行動をしている様子がみられることである。1945年以前には日本の立場に立った発言が散見され、戦後はアジアの状況や国際情勢に合わせた行動や発言をしている。しかし、1945年以前については、時代の制約も考慮に入れなくてはなるまい。つまり、1941年のインタビューで、国賊になることを恐れる旨の話をしているが、記録として残る場合には当時の風潮に即した発言をしなくてはならなかったという制約があったと推察される。これは、

記録として公表されない近衛文麿に対する進言のメモのように、重慶にある蒋介石の国民政府と直接交渉を行う必要性を説くなど、当時の日本の国策と異なる見解を述べていたことを考えると、日本の立場に立っての発言も時代の制約によるものであり、それが山田純三郎の本意であると断定するのは難しいであろう。

また、山田の日中関係観や中国観、さらにはアジア観の基軸になっていたのは、孫文の「日支聯盟」、「大アジア主義」であった。もっとも、山田純三郎はそれらを自分なりに理解した上で、日中関係観などを導き出して発言していた様子も明らかになった。一方で、そうした理解は、戦後も山田純三郎にとって、日中両国間の関係だけでなく、より広く世界やアジアに対する眼差しの土台になっていた。

したがって、孫文支援者として活躍した山田純三郎は、「日支聯盟」、「大アジア主義」の影響を強く受けて孫文死去後の時代を生きた人物であると位置付けられる。これは山田純三郎一人の特徴なのであろうか。それとも、他の孫文支援者である宮崎滔天や、梅屋庄吉、そして山田純三郎と同じく戦後の1947年まで生きた萱野長知にも共通するのであろうか。この点は今後の課題である。